

特別寄稿

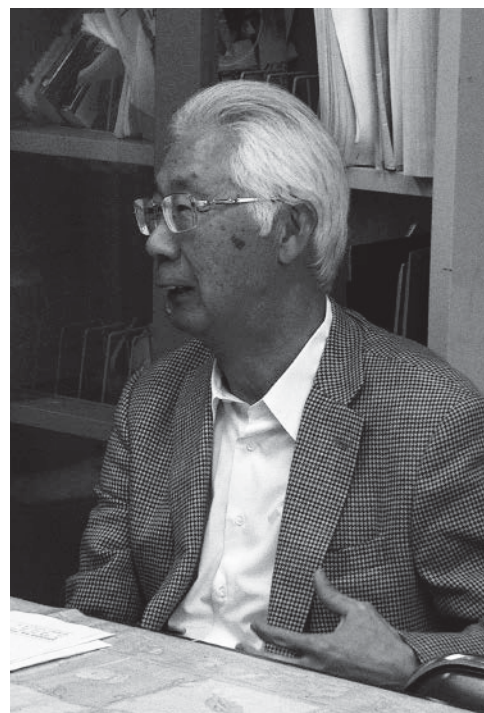
野呂 進 陸上競技人生を振り返る ＜前編＞

（専修大学商学部教授／専修大学陸上競技部 部長／専修大学スポーツ研究所 前所長）

聞き手：佐藤 雅幸（専修大学経済学部教授／専修大学スポーツ研究所長）

満園 文博（東京新聞・東京中日スポーツ／専修大学講師）

構成：木村 啓司（体育施設出版）



アジア大会連続メダル

佐藤雅幸 専修大学陸上競技部の監督として多くのランナーを育ててこられた商学部教授で、スポーツ科学研究所前所長の野呂進先生に、これまでの陸上競技人生について振り返っていただきます。野呂先生の現役時代から陸上競技取材し続けてきたスポーツジャーナリスト、満園文博さんを交えて進めていきます。

野呂先生は中距離種目の第一人者で、千五百 m の日本代表としてアジア大会の 1970 年バンコク大会、74 年テヘラン大会に出場され、70 年は金メダル、74 年は銀メダルを獲得されました。アジア王者になった当時のお話をお聞かせください。

野呂進 アジア大会のライバルは、ユニス（Muhammad Younis）^{*1} というパキスタンの選手でした。バンコク大会では僕が勝ったが、4 年後のテヘラン大会ではユニスが勝った。彼は当時の千五百 m のアジア記録を持っていて、ヨーロッパの試合にも出ていたらしい。

*1 パキスタンの中距離種目の第一人者で千五百 m、三千 m、五千 m の国内記録は今も破られていない

満園文博 確かに当時のトラック種目では南アジア勢が強かったです。インド、パキスタン、スリランカ（72 年まではセイロン）、あるいは中東勢も含めて一時代を築いていました。

野呂 だから八百 m ではなかなか日本が勝てなかったものです。

満園 彼らは足の長さで運動能力で優っていました。四百 m の速さを持っていて、なおかつ後半も伸びる力も持っています。体型が日本人とは異なりました。

カッコ良い走り、潔いレース

佐藤 野呂先生は現役時代、どんな選手だったのでしょうか。満園さんはどんな印象で記憶していますか？

満園 ひと言で言えば、カッコいい選手です。

野呂 そうだったかなあ（笑）

満園 本当です。そして、野呂先生のレースのスタイルをひと言で表すなら、それは「潔さ」です。

野呂 ああ、それはそうだったかもしれない。

満園 後ろに付けてゴール手前で追い抜いて、というような走法とは異なり、先頭に立って引張りながら、最終的に勝ってしまうのです。

やはりそれは「潔さ」ですよ。

野呂先生には「セコく」勝つレースはなかったですね。

野呂 確かに、わりと早く仕掛けていましたからね。

満園 先に仕掛けて、徹底的に引っ張ってというレースが印象に残っています。人の後ろに付いてどうのこうのではなく、自分からレースを作って「最後はオレが責任を持つ」みたいな走りでしたよ。潔いですよね（笑）

野呂 結局、僕にはスピードそのものがないから、ああいう走りをせざるを得なかった。競り合えば最後は負けてしまうから。

ライバルの存在

満園 野呂先生には大阪ガスの水野一良^{*2}さんというライバルがいましたね。

*2 日本選手権千五百 m において大会史上最多タイの 4 連覇（54 回～57 回大会）を果たした他八百 m でも 54 回、57 回大会を制した

野呂 水野にはキレがありました。僕にキレがあれば、早くから仕掛けることはなかった。相手のスピードを殺すにはどうすればいいのか、ということ突き詰めた結果、早めに仕掛けることにしたのです。

満園 水野さんと野呂先生のレースは、いつも名勝負になります。タイプは異なりますが、双方ともに強い。水野さんも自分の流儀で走り、



東京ユニバーシアード大会の千五百 m 走で 10 位 (左から2人目)

野呂先生も自分の流儀で走る。そして、スポーツのアヤが生まれるわけですね。

漠然と見ていたら気づきませんが、非常に面白い名勝負が陸上競技、とりわけ中距離には潜んでいます。マラソンは 42.195km を、2 時間近くかけて走りながら考えるという競技です。でも、中距離の千五百 m は、わずか 3 分 40 数秒ほどの世界です。その時間に壮絶なドラマが凝縮されているのです。

野呂 走りながら「こいつに勝つにはどうすればいいだろう」とひたすら考えていました。

満園 野呂先生はよく、先行してレースを作っていました。それに対して「最後のスパート力は俺の方がある」という選手は後ろに付きます。

野呂 水野もまた独特な走りでした。ラストに出て行っても勝つけれど、自分でレースの主導権を握りたいタイプでもあった。

満園 当時、試合を取材していると、大体いつも 2 人がレースを引っ張っていたのですよ。

野呂 水野と僕は同年代で、彼は大阪ガスの養成所からそのまま大阪ガスに進んだはず。ずっとライバル関係で、日本選手権は彼が勝ち続けていた。

満園 その水野さんの日本選手権連覇を止め

たのが野呂先生でした。

日本選手権自己ベスト優勝の影で

佐藤 野呂先生が勝った 1974 (昭和 49) 年の日本選手権の千五百 m はどのようなレースだったのでしょうか？

野呂 そのレースは自己ベストも出しました。

満園 普段、野呂先生はあまりトラックで感情を表に出さないタイプでしたけど。僕は水野さんが悔しがっていたことも憶えています。でも、水野さんもいつかは負けるという気がしていたのかもしれない。

1973 (昭和 48) 年まで水野選手が 4 連覇していましたが、この年は野呂先生が 3 分 45 秒 6 で勝ちました。

野呂 そのレースは僕の思いのままだった。残り 300m 辺りから出て行ってそのままゴール。今思うとこのシーズンは、春先からあまり練習ができていなかった。それでも、アジア大会出場権が懸かっていたから「もう一度出場したい」という気持ちだけで走った。ゴールした時は本当に嬉しかったです。

満園 つまり、春先から練習ができていなかったシーズンに自己ベストで勝ったということですか？

野呂 前年 10 月に長男が生まれ、年が明けて 2 月か 3 月頃、大学が春休みの時期に妻の父親が倒れました。時間の融通が利いたので、義父の看病は僕が中心でした。夜中に発作が起きても対応できるよう、秦野の病院に泊まり込みました。僕ら夫婦は共稼ぎだったので、義母が子供の面倒を見てくれていた。代わりに夜は僕が義父を看病して助け合っていました。

満園 あの年の日本選手権はアジア大会の選考を兼ねていましたから 6 月頃の開催です。そういうプライベートを抱えていながら、よく間に合いましたね。

野呂 言われてみるとそうですね。確かに学生たちもビックリしていました。「先生、ろくに練習していないのに！」って (笑)

満園 長男の誕生、義父の看病、そうした出来事が逆にモチベーションになったということでしょうか？

野呂 そういうことを言い訳にしたくないという気持ちが強かった。当時、27 歳でした。

トラックの格闘技

満園 練習不足のまま、アジア大会の懸かった日本選手権で優勝、しかも自己ベストで勝ってしまうというのは大変なことです。僕は野呂

先生の走りを「潔い」と表現しました。中距離では終盤のスパート力がある選手にしてみれば、野呂先生のようなタイプは格好の標的にされてしまいます。レースを作ってくれた上に、「最後はキレのあるオレが勝つ」というふうに。それにもかかわらず、自分からレースを作って走っていくというのは、潔いですよね。

野呂 自分でレースを作ったという意識はあまりないのですが、レース中にボンボンと「遅いぞ」とか囁いて、相手にプレッシャーをかけながら走っていましたね（笑）

満園 スタンドまでは聞こえてこないけれど、じつはあのトラックの中では凄まじい駆け引きが行われていますよね。中距離という種目は「トラックの格闘技」とも言われ、身体的な接触というぶつかり合いもありますが、言葉のぶつかり合いもあるという独特な世界です。だから、若手選手がベテランの強い選手にけしかけられたら、怯んでペースを乱すこともあります。

野呂 じつは僕にもそんなことがあった。大学4年の時に出た日本選手権で、岩下さん（岩下察男・旭化成）^{*3}の足をついてしまった。すかさず「すいません!」と謝ったら、「走ってる時にそんなこと言う必要ねえ!」って。

それでまた「すいません」って口をついて出てしまった（笑）

すると「レース中なんだから、そんなこといいんだ!」って。レースを通じて先輩ランナーから教わりました。

^{*3} 高鍋農高（宮崎）—中大—旭化成。高校駅伝から頭角を現し、箱根駅伝の中大6連覇の中心選手の1人。1～3年は2区、4年は4区を担当し、2～4年は区間1位。日本選手権千五百mで3連覇（50～52回）、東京五輪五千m日本代表。

満園 岩下さんも強い選手でした。中大が箱根6連覇当時の後半3年に活躍された。三千m障害も走ったし、東京五輪の五千mにも出ています。

野呂 あの頃の中大は本当に強く、五輪に出た猿渡武嗣^{*4}さんもいた。

^{*4} 三千m障害で東京とメキシコ両五輪の日本代表。箱根駅伝は1～3年まで1区、4年は4区を担当。

フォームとトラックの過渡期

佐藤 野呂先生が走るフォーム、姿などはいかがだったのでしょうか？

満園 とても綺麗な走りでした。

野呂 自分のフォームは見たことがなかったからなあ（笑）

今でこそ、ビデオカメラが普及しているから撮影して自分のフォームを確認するというのが普通になっていますが、僕の現役時代の映像は残っていないでしょう。

満園 それは残念です。例えば先生の教え子の石井隆士君^{*5}、マラソンの瀬古利彦君^{*6}をイメージすると分かりやすいですが、彼らはそれほど足が長いわけではないです。ところが野呂先生は、足が長く、腰の位置も高い。だからっこ良く見えるのです。

^{*5} 日体大体育学部教授。1977年、ワールドカップ（独デュッセルドルフ）で千五百mの日本記録（3分38秒24）を樹立。27年間にわたり破られなかった。

^{*6} DeNA Running Club 総監督。マラソン15戦10勝のほか、五千m、一万mなどで日本記録樹立。四日市工から早大入り、箱根は4年間2区を担当、3,4年は区間賞。中村清監督の勧めで1年からマラソンを開始。ロス、ソウルのマラソン日本代表。モスクワは代表選出も日本のボイコットで不出場。

野呂 あの当時の選手は「腰高にしろ」と指導されたものですが、石井と瀬古はそんなに腰高では走らなかった。でも、それでいて腰が安定していました。

満園 ただし、変則的な走りはしませんでした。腰が低いなりにそのまま、力強さと回転で走っていました。それで成功していました。

野呂 瀬古や石井を見ると、タータン（全天候型）トラックの出始めの時期でもあり、逆にああいう走りの方が合っているのかなと思ったものです。

かえって僕のような走りをしていると、トラックの硬さの影響で、スタートすると間もなく「バーン」と太ももが張ってしまふ。

今となっては言い訳になってしまふが、テヘランのアジア大会で敗れたレースを思い返すと、ウォーミングアップは本会場をまったく使えず、サブグラウンドで行わなければならなかった。本番を走り始めて100m辺りで太ももが張ってしまった。「あ、これはラストまでこの張りは消えない」と覚悟しました。

満園 土のトラックでは着地の際「ズルっ」という「遊び」がありますが、全天候型トラックではそれがありません。だから、キックした時の衝撃がそのまま足にはね返ってきて負担がかかるわけですね。これは慣れないとたいへん苦勞しますし、実際に故障する人も多かったです。
野呂 今のよう練習から全天候型に舗装さ

れたコースで走っていればそんなことはないが、当時僕らは通常の練習はアンツォカで行っていて、試合は全天候型のトラックを使うことがあった。だから、そういう面での走り方の調節が必要でした。

満園 当時はちょうどトラックの転換期でした。国内の競技場では全天候舗装があるところと、ないところが混在していました。サブトラックはアンツォカで、本会場は全天候型という施設もありました。サブトラックと本会場で同じように走るというのは、なかなか難しかったのではないですか？

野呂 トラックの硬さによって、足の張り方が全然違います。

そういうトラックの硬さは意識したことはあったけれど、自分自身のフォームが良いなど意識することはあまりなかった。後半のキレがなかったから、むしろ間延びした走りだったのではないかという気がしていましたよ。

満園 野呂先生はまさに日本の競技場のトラックが過渡期を迎えていた時期にトップを極めていたランナーなどだと思います。その後に登場した石井君や瀬古君は全天候型トラックの時代の選手です。腰がピタッとブレない走りで、2人のフォームはよく似ています。

佐藤 そうすると、野呂先生は腰が高くダイナミックなストライドだったということでしょうか。

満園 そうです。それがカッコ良かったのです。女子にモテる走りだったのは2人よりも野呂先生の方です（笑）箱根ランナーでもあったこの2人、瀬古君はマラソンに進みましたが、野呂先生の教え子らしく石井君はスピードを武器に、野呂先生の種目を目指したのだと思います。

野呂 石井には終盤のキレの練習をよくさせました。ラスト160mあるいは120mから切り替える練習です。

満園 石井君の千五百mは強かったですよ。

数学好きの少年

佐藤 現役時代の話から日体大での指導者の話題に入りましたが、少し時間をさかのぼります。野呂先生が陸上競技を始めたきっかけと、指導者を志した経緯についてお聞かせください。

野呂 郷里は青森県弘前市で、石川小学校、石川中学校から弘前高校に進みました。地元ではわりと足が速い方でした。中学の頃から地元の大会に出てはいましたが、1位になった記憶がない。けれど、大体2位か3位には入っていました。

高校は県立校で、わりと陸上が盛んな学校ではありましたが、陸上部にはあまり強い長距離選手がいなかった。短距離では井沼清七さん⁷というオリンピック選手を輩出しています。

⁷ 1907(明40)～1973(昭48)。青森県初の五輪出場選手。中里尋常小学校高等科から県立弘前中学(旧制)、早大に進む。織田幹雄、南部忠平、西田修平らと組み四百mリレーを戦った。1928年アムステルダム五輪四百mリレー日本代表、予選敗退。引退後は日本陸連常務理事、評議員、東京陸協副会長を歴任、松坂屋百貨店常務取締役、株式会社松栄食品社長等を務めた。

佐藤 弘前高校を進学先にした理由をお聞かせください。

野呂 僕は小学生の頃から教員を志していました。陸上は好きだったけれど、そんなにのめり込んではいなかった。頭の中では「弘前高から大学に行って教員になろう、だから陸上競技云々というより弘前高を目指そう」と思い描いていた。僕が通っていた石川中学からは3人くらいしか入れない高校だったけれど、どういわけか入れちゃった。

満園 弘前高といえば歴史のある進学校です。青森の名門ですよ。

野呂 もともと僕は数学の先生になりたかった。数学は公式さえ覚えてしまえば、あとは何もなくても教えられるものだ、という発想だったからです(笑)

満園 その数学こそが、野呂先生の走りに影響を与えたのだと、僕は思います。僕が取材していたレースで野呂先生は、計算して走っていたという気がします。

先ほど僕は野呂先生の走りを「潔い」と言いましたが、自分でレースを作って相手のスピードを殺してしまう「理詰め」の走りだったと確信しました。

千五百mという種目は、わずかに3分数十秒の勝負で、ペース配分をたちどころに計算しなければなりません。強烈なラストスパートを持たない「この選手にこれ以上逃げられたらまずい」とか、「ここまで引っ張って差をつけておけば逃げ切れる」といった考え方と数学はどのように関係していたのでしょうか？



自宅前にて(中学時代)

野呂 実際のレース中は自分の前を走る選手もいて、必ず主導権を握ってという展開ばかりではないですが、要はラストスパートを掛けるタイミングをどこに置くか、ということです。

最後の直線、ホームストレートで仕掛けたのでは絶対負けてしまう。だからレースの時は、常に残り1周の鐘がなる前には良いポジションに付けておくようにして、走りながら1200mの通過タイムを予測し、残り300mをどのくらいで走れば勝てるのかを計算する。ペースが早い展開であれば「いま行くべきだ」とバックストレッチから飛び出します。できればバックストレッチでトップに立ち、後ろが付いて来るようだったら、もう1回スパートする。

二段構え、三段構えができなければ、僕は勝てない。だから、早めに仕掛けていたのです。

満園 それで早めに揺さぶっていたのですね。出ると見せかけて相手のスタミナを削ぎ、スパートを効かなくなるようにするのですね。中距離の駆け引きは本当に凄まじいです。

野呂 僕にはラストスパートのスピードがなかった。優勝は少なかったけれど、いつも上位には入るタイプの選手でした。

満園 優勝が少ないとはいえ、日本選手権も、アジア大会もチャンピオンにもなりました。大一番で勝つところが非常に興味深いですね。

野呂 僕も大きな試合になるほど足は震えまし

た。ところが、いざピストルが鳴ってしまうと、冷静にスッとレースに入れたものです。

満園 それは若い頃からですか？ それともベテランになってからですか？

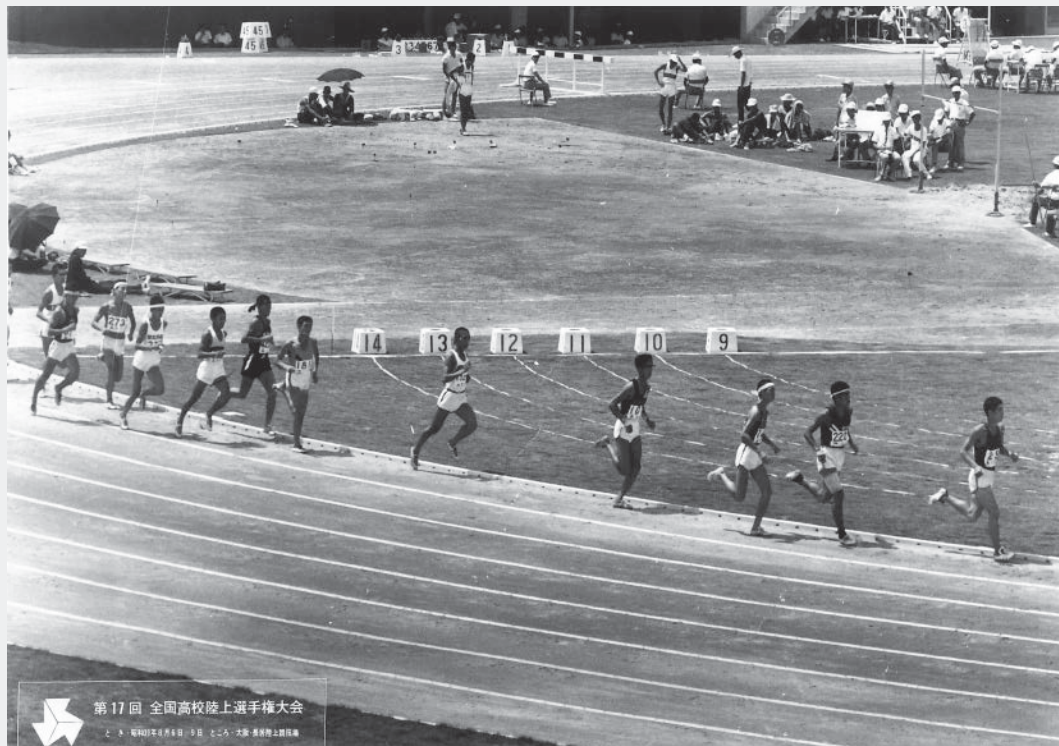
野呂 特に強くなってから、大きな試合に出るほどそういう傾向でした。ピストルが鳴るまでは足が震えているのですが、鳴ってしまえばレースに集中できました。

満園 面白いですね。国内でトップクラスになってからの野呂先生は、例えるならば相撲の力士。番付が上がると、格下相手には「名前で勝負ができる」ということがあります。名前で圧倒し、土俵に上がる前に勝負が付いているということですが、野呂先生はそういう経験はなかったのですか？

野呂 それどころか僕にはスピードがないから、まずは予選突破という課題がありました。遅いペースでレースが展開すれば、スピードのない僕は予選落ちしてしまうかもしれない。

中距離では、八百mの選手が千五百mに出ることもありますからスピードのある選手がけっこう多い。

満園 そうすると、やはり僕が見てきた野呂先生のレースは、じつは数学で走っていた。数学が競技に活かされていたのですね。



全国高校陸上選手権大会(第17回大阪大会)の千五百m障害で2位入賞(表彰台左から2人目)



良きライバルの工藤君(左)と野呂所員(右)

全国高校陸上選手権大会(第17回大阪大会)の千五百m障害で力走(右から4人目)

野呂 言われてみるとその通りです。

例えば、練習で1000mを10本走るにしても、400、800、1000と1本ずつ走ってリカバリーしてという練習を繰り返しても、タイムは頭に記憶していました。ほかの部員は後でマネジャーのところに行って記録をメモしますが、僕は頭に入っているから練習が終わったらマネジャーのところには立ち寄らずに帰宅し、そのまま練習日誌を書くことができました。

満園 頭の中でメモが出来上がっているからこそですね。

野呂 数字だけは頭に入るのです。漢字とか、英語とかはそうはいきませんでした(笑) 英語ができていれば、教育大学に行っていたかもしれませんね。

中・高校とも顧問は日体大出身

満園 野呂先生は数学教師になるための大学ではなく、体育教師になるため日本体育大学に進まれました。

野呂 中学の時の成績は学年の上位で、その頃は「弘前高から地元の弘前大教育学部に入って教師になろう」などと考えていましたが、甘かった。高校1年の秋にあった実力テストで、僕を含めて学年の半数近くが数学で0点だったのです。「こりゃ、たまらん」という気持ちで、進路を考え直しました。それで数学に次いで好きだった体育の教師を目指すことにしました。そ

の頃は徐々に陸上競技にも興味が芽生えてきた時期でもありました。

体育教師を目指した理由は中学、高校の陸上部で教わった先生の存在が大きいです。石川中の丹藤純也先生は、若くて一生懸命な先生でしたので、周りの先生も陸上部を応援してくれました。丹藤先生は日体大出身でした。丹藤先生は大学では棒高跳びの選手でした。教員になってからは指導する傍ら、走り高跳びで国体に出場していました。

満園 丹藤先生という方は高い運動能力の持ち主だったんですね。

野呂 丹藤先生からは陸上競技というものは楽しいものだということを教わりました。長距離の生徒は長距離だけやればいい、というのではなく、いろんな種目に挑戦させてくれました。

満園 中学生が長距離だけガンガン走らされていたら、面白くなかったかもしれませんね。高校の陸上部ではいかがでした？

野呂 じつは高校ではあまり優勝した経験がありません。東北大会には1年の頃から地元で6番以内に入っていたから、出場はしていました。ところが3年の春先に盲腸をやって、インターハイの県大会につながる大会で、八百と千五百障害にはなんとか出ましたが、あまりスパイクを履いてなかったものだから、アキレス腱が腫れてしまい、いちばん出たかった千五百mに出られなかった。県大会の八百では田名部高に小島

伸造という強い男がいて負けました。^{*8} 結局僕が勝ったのは千五百m障害だけ。東北大会では八百mは早々にインターハイ出場が決まったのですが、千五百m障害ではこれまた同郷のライバルだった弘前実業の工藤次雄が6番に入るかどうかという、インターハイ出場に際どころを走っていました。僕は工藤と一緒にインターハイに行きたかったし、後ろについて走っていたので、「工藤、頑張れ、頑張れ」ってライバルを応援しながら走って、5番か6番で全国切符を取り、結局、彼は大阪のインターハイでは2位に入りました。

満園 地方大会よりも順位が上です。そこが勝負の面白いところですね(笑)

^{*8} 第17回青森県高校総合体育大会男子八百m
①小島(田名部=2分01秒1)、②野呂進(弘前=2分02秒6)、③柴田由明(東奥義塾=2分04秒0)

インターハイと寄せ集めの駅伝チーム

野呂 インターハイの八百mでは、それほどスピードがないのに早くから仕掛けたので、決勝まで勝ち残って7位。当時は6位までが入賞でした。八百m、千五百mでその頃強かったのは、早稲田に進んだ泉南(大阪)の井上栄千彦で、八百mは優勝、千五百mは2位でした。千五百mと千五百m障害は鳥取工業の島田正通が勝ちました。中距離から早稲田に行く選手がものすごく多かった。五千で勝った秋田工業の中川衛も早稲田に進んだ。ちょうど早稲田に体育のコースが新設された頃です。

2年と3年の時には地元の駅伝に寄せ集め



全日本大学選手権の八百m走で優勝(左から3人目)

で出場しました。長距離選手は後輩に1人か2人いた程度でしたが、それで駅伝の大会に出たのです。陸上部は僕を含めて2、3人。あとはスキー部や野球部から人を集めて県内の試合だけに出場しました。東北大会には出場せずチームは解散。スキー部はシーズンが始まるし、野球部からの助っ人はエースだった男で、卒業後は明治大に進みました。

そんな具合で、中距離種目はほとんど僕1人で走っていました。陸上競技が好きになったというのは、高校の恩師である成田正先生が「あれをやれ、これをやれ」と言わなかったから。練習スケジュールも自分で組み立てて先生に提出し、手直ししてもらいながら練習していました。

満園 やはり若い頃から管理ばかりされると、その時は伸びるかもしれませんが、先々伸びないということはよく言われることです。

「選手が管理され過ぎると、自ら考える力を失うから、ほどほどにしなければならぬ」と、小出義雄監督⁹も言っていました。

中学時代にいろいろな種目を経験することができ、高校時代には練習スケジュールを自主的に組み立てた。野呂先生は良い指導者に出会い、良い中学、高校時代を過ごしたのですね。

⁹ 佐倉アスリートクラブ代表。五輪女子マラソンでバルセロナ銀、アトランタ銅の有森裕子、シドニー金の高橋尚子らを育成。順大で箱根に3度出場、卒業後千葉県内で高校教員、市立船橋を全国高校駅伝優勝させ、リクルート、積水化学で多くのランナーを育成、現在に至る。

野呂 僕もそう思います。高校の成田先生も日体大卒でした。

佐藤 そういう縁があって日体大を選ばれ、指導法の本原が確立されていったのですね。

野呂 成田先生は「俺に氣を使うな、どこでも好きな所に行け」と言ってくださったが、僕は英語が苦手で(笑) 英語が並みにできていれば、地元の大学に進んだはず。ただ、もし入れたとしても英語で苦労したろうし、「日体大なら英語で苦労はしないだろう」とも思っていました。親は地元の弘前大学教育学部に行ってほしかったはず。その頃、弘前大は二期校でした。だから「中学の体育教師ではなく、高校の体育教師を目指すから日体大に行かせてほしい」と親に頼んで行かせてもらいました。

教員になりたかった父の存在

(本文は2014年12月時点)

佐藤 中学、高校時代のお話から日体大に進



左から、木村啓司氏、満園文博氏、野呂所員

まれた経緯についてお聞きしましたが、ご家族についてもお聞かせください。

野呂 僕は7人兄弟の末っ子で、いちばん上とは20歳近く、すぐ上の姉とは6歳離れています。姉、兄、そして姉が4人、そして僕。2男5女の兄弟です。上の姉と兄はもう亡くなっています。実家は農家です。

父・大吉は農業を営み、母・ナミと7人の子どもを養いました。父は地元で試合があると、よく応援に来てくれました。大学3年の時に父は亡くなったので、男同士酒を酌み交わすこともありませんでした。進という僕の名前の由来を直接聞くこともありませんでした。

大学に入ってからなのですが、実家に帰ると本棚に教育に関する本が置いてありました。それは父の本でした。その時初めて父から「俺も教員になりたかった」と聞かされたことを覚えています。

満園 そういうお父さんの気持ちが野呂先生に受け継がれているのですね。地元の弘前高から、上京して日体大に進みましたが、教員になるコースを歩んでいますから、お父さんもきっと「この子は教員になるだろう」と思われたでしょうね。

野呂 そうです。僕も高校の頃、親父に「弘前大なら中学、日体大なら高校の先生になる」と話していましたから。ただ、その頃はまだ大学で箱根駅伝を指導するという発想はありませんでした。

佐藤 その学生時代のお話、指導者としての取り組みなどまだまだ話は尽きませんが、次回じっくりお聞きします。